



と うた かぐら ～田歌の神楽(祇園祭)～

トウトウトと受け継がれる田歌の祇園祭

「やとーせえー、やとーな」
美山川のせせらぎに、奴（や
つこ）の掛け声と笛や太鼓の
お囃子（はやし）が聞こえてきます。

「祇園さん」として親しま
れる美山町田歌の八坂神社。
ここで、毎年七月十四日に行
われる「田歌の神楽」では、
鬼（やせ）役の子どもを先頭
に、てんぐや奴、火男（ひよ
つとこ）、お多福などが、祭り
の当番役となる「宿」から神
社への道中を練り歩きます。

神社へ着いた一行は、神事
の後、「かぐら」「さんざり」
「三の舞（さんばそう）」など
を奉納します。老いも若きも



▲「宿」から八坂神社まで一行が練り歩きます



▲神楽の奉納「三の舞（さんばそう）」

太鼓の腕自慢、ひよつとことお
多福の掛け合いに、こつけない爺
との絡み加わり、集まった
人々の心をくすぐります。
この「田歌の神楽」は、平
成三年に京都府の無形民俗文
化財に登録されました。地名
にもなった田歌（とうた）は、
足を踏ん張って力強く太鼓を
奉納することから「踏歌（と
うか）」や、「踏田（田楽）舞
い」などが由来と言われます。
豊作を願う古き良き芸能が
山あいの集落に受け継がれ、
とうとうと鳴り響く太鼓が本
格的な夏の到来を告げます。

ぶらり案内人



田歌区長 大牧 祥一さん

「田歌の祇園祭は、年に一度、集落のみんなが集まって心一つになれるとき」と、田歌区長の大牧祥一さん。「田歌で生まれ育った子は、みんな小さいころから祭りの太鼓や笛を教わり、誰でもできるようになります。楽譜も書いたものもないし、昔から人から人へとずっと教え継がれてきたんです」田歌地区には1ターンの移住者も多く、この祭りで笛が吹けるようになってこそ、一人前の土地の者として認められるそうです。「今は、習わしで役を務めるのは男性のみですが、これからは女性の参加も考えていきたいと思います」と話していただきました。

むらかみゆきひこ創作
「田歌の田の歌」※抜粋

昔むかし、ひどい飢饉に襲わ
れて、村人は困り果てよった。
そんなある日、芦生の天狗峠
の方から、赤い顔で立派な鼻の
天狗が、自分のカラス天狗、そ
の子分のカラスを引き連れてや
つてきおった。天狗は、村人が
カラス踊りをして辱めた仕返し
にやって来たと言う。八坂神社
の神主が「大切な種をほじくっ
たお仕置きじゃ。今度の祭りじ
や天狗踊りもせにやならんわ
い」と笑うと、天狗は一層真っ
赤になって怒り、カラスたちは
カヤ屋根をほじくっては大きな
フンをたれ、飛び帰っては、ま
たフンをひりよったんじや。
ところが、春になるとカヤ屋
根に菜の花が咲き、麦が穂をつ
けた。カラスのフンにまじった
種がカヤ屋根にまかれ、そりや
立派な作物が実って大豊作。村
は活気づき、田んぼも楽しそう
に歌うとるようじやった。ほい
で村の名は田歌となり、それか
ら毎年、八坂神社の田楽として
お祭りが行われておるんじや。

※「田歌」は行政区名としては「たうた」と表記しますが、「とうた」の呼び名で親しまれています。